

# 近世初期におけるもっとも古いスペイン 通史について（その1）

——チュルケ・ド・マイエルヌの『スペイン総史』——

*La plus vieille Histoire Générale de l'Espagne*

高 橋 薫

## 要 旨

ルネサンス期を境にして、「国家」という体裁を有する国家はそれぞれに、おのれのアイデンティティーを他国や自国民に発するため、自国史の編纂をすすめた。フランスはその代表だが、都市国家にまで枠を広げると、数点のフィレンツェ史もその例であり、英国もドイツ各邦もその例にもれない。しかしながら、西欧16世紀から近世初期にかけてフランスとならぶ軍事大国であったスペインの反応は鈍かった。これはレコンキスタまでイスラム教支配下に置かれていた影響もあって、記すべき古代史を有さなかったからだと思われる。しかしながら17世紀初頭、イエズス会士のファン・マリアナはスペイン人として初めて、断片的・もしくは局所的でないスペイン通史をラテン語で上梓し、たちまちスペイン語訳され、英訳版も数十年を経ずして翻訳された。しかし実はマリアナのスペイン通史は近世初期にあって初めての「スペイン通史」ではなかったのである。マリアナに先行することわずか、リヨン改革派の牧師、ルイ・チュルケ・ド・マイエルヌがマリアナ以上に大部な「スペイン総史」を発表していた。しかもこの総史は高く評価され、マリアナと同じく英訳本も刊行されている。本稿はチュルケの「スペイン総史」をわが国で（いや、おそらく現代の西欧史家の中でも）初めて紹介するとともに、いくつかの視点からそのオリジナリティーを本場スペインのマリアナの通史と比較対照しながらさぐるものとする。なお緻密な作業で紙幅が嵩むため、数回の分載を予定している。

## キーワード

西欧近世初期、スペイン史、チュルケ、マリアナ、心性史

## 0. はじめに

標題を見ていぶかしんだ方もおられると思う。筆者が属し、運営を託されているのは「フランス・ルネサンス研究チーム」であり、それがなぜ「スペイン通史」なのか、と。本格的な「スペイン通史」の最初の著者は、ファン・デ・マリアナ<sup>1)</sup>、かの『王ノ教育』<sup>2)</sup>で暴君弑逆論を肯定し、ためにアンリ4世治下のフランスではマキャヴェッリ以上に危険思想家の称号を授けられたマリアナ、70年後にドラゴナードを避けオランダに亡命した改革派で近代聖書学の嚆矢、リシャール・シモンがその旧約聖書の批判的歴史、新約聖書の批判的歴史のなかで、優れた校閲本の編者としていく度も称讃したマリアナ<sup>3)</sup>ではなかったか、そしてその本格的な「スペイン通史」<sup>4)</sup>とは1592年、ラテン語で執筆された全20巻を1冊のフォリオ判にまとめられたものではなかったか、と。ご指摘は正しい——もし、「スペイン通史」を執筆した最初のスペイン人は誰か、と質されるなら。しかしマリアナの『スペイン通史』(以後、マリアナの著書(それが、1592年にラテン語で世に問われた *Historiae de rebus Hispaniae* でも、そのラテン語版をみずから手に取ってスペイン語に訳して2巻のフォリオ判の形状で、トレドで1602年に増補改訂し、上梓した *La Historia general de España* であっても、和語にした場合には、こののち本稿でとりあげるマイエルヌ<sup>5)</sup>の、マリアナが起草した通史以上に膨大なフォリオ判2冊の *Histoire Generale d'Espagne* と同一の標題であるので、お読みいただく方々には余計なお節であろうが、あるかも知れない——事実、手元の文献を参照すれば17世紀末に刊行されたマリアナの英訳大フォリオ判(総数900余ページ)では、総題を *The general History of Spain*、17世紀初頭に刊行されたマイエルヌの小型フォリオ判(総数1300余ページ)の総題を *The Generall Historie of Spaine* と、年代にもとづく綴字の差異をのぞけば、同一の標題となっている——取り違いを懸念し、マリアナの通史を『スペイン通史』、マイエルヌの通史を『スペイン総史』と

日本語で訳し分けておく）に先立つこと数年前、その第3版の巻頭にもそのまま遺されたアンリ3世への献辞の日付を尋ねれば1586年8月、ブリュネに由来を尋ねれば1587年に（これはあるいは著名な日記記録者ピエール・ド・レトワル<sup>6)</sup>の証言が与っているのかも知れない）、これも浩瀚な、フォリオ判2冊に及ぶ「スペイン通史」を、学識語でもスペイン語でもなく、著者本人の生来の言語であるフランス語で世に問うたフランス人改革派牧師、チュルケ・ド・マイエルヌがいたことはフランス文学史はもちろん、スペイン史の専門家でも、どちらかといえば、奇特な方、珍しい方ではないかと思う。本稿は時としてマリアナの『スペイン通史』（のフランス語訳）に頼りながら、チュルケの『スペイン総史』を簡単に（そう、1630年代の加筆補加されたフランス語版でフォリオ判二千数百ページという大作からみれば、どのように枚数を尽くしても、「簡単に」というほかはない）、可能な限り「学術的に」（「学術的」たることが可能かどうか不安ではあるが、さもなければ『人文研紀要』に投稿されたほかの先生方に、さぞや失礼にあたるであろう）紹介することを目的とする。チュルケといえば、ピエール・ド・レトワルの言及が示すように『貴族・民主制的君主制』により、よく知られてはいるものの、この通史については後世のひとびとからは減多に事上げされることがないくらいで（あるいは皆無か）、筆者の知見の及ぶ範囲では『スペイン総史』に紙幅を割いた研究書はまず見当たらない以上、老いぼれた筆者の貧弱な紹介であってさえ、いささかなりともチュルケの鎮魂には役立つであろう、大それた願望に支えられている。

#### 0-1. 本稿の起源

フランス16世紀にわずかなりともかかわってきた筆者なりの、本稿の位置づけについて一言しておく。本稿は完成を見ることは絶対ないであろう筆者の『チュルケ・ド・マイエルヌの政体論』の補遺として発表されるは

ずであった。わたくしごとではあるが、老いぼれてなお夢を彷徨う老学徒の関心の由来を述べることをお許しいただきたい。筆者がチュルケに関心を寄せたのはおそらく20余年前になる。そのきっかけがピエール・ド・レトワルの評価にあったのか、改革派異端児ジャン・モレリの国政論『キリスト者の規律ならびに国制論』（1562年）<sup>7)</sup>にあったのか、いまとなっては記憶に遺っていない。1994年12月に「チュルケ・ド・マイエルヌの政体論とその周辺（I）——『貴族・民主制的君主制』〔現在の筆者の関心点からいうと『貴族主義的・民衆主義的君主制』と訳したいが、この稿では最初に紹介した標題を採用しておく〕要約篇——」の筆を擱いた、全篇がその要約篇に費やされた個人研究誌『フランス16世紀読書報告（1994）』の本論（要するに「要約篇」の本論だ）の末尾をこうまとめている。「不細工乍ら、以上が可能な範囲で詳細に辿った、四折判で総計580ページに及ぶ『貴族・民主制的君主制』<sup>8)</sup>の概要である。チュルケがアンリ4世に宛てた建白書が同じ判型で40ページであることを思い起こせば、その完成に注ぎこまれた情熱の程に感嘆する以外ない。建白書であることゆえに理念的・概論的にとどまらざるを得なかった原形よりも、（相対的に）具体的・実現可能性においても、マリー・ド・メディシスの女摂政下のフランスで批判される運命を負った。それらの批判者たちが『貴族・民主制的君主制』の正鵠を射ていたかどうか、チュルケがどう応酬したか、そして論戦の最中でチュルケの政体論が本来有していたはずの、論旨の幅がどう縮小するにいたったか——。政体論の長すぎる要約を終えた今、聊かでもそのまとまりの欠如を弁明するために、『貴族・民主制的君主制』の歴史的 position づけとともに、こうした論戦の位置づけも試みなければなるまい。それが「検討篇」の課題である」[136]。——こうして筆者は「検討篇」を試み始めた。それには16世紀研究の大先達である国学院大学の故成瀬駒雄先生からいただいた「この連休に入ってやっと「チュルケ」を拝読し、その細部にわたる

記述、とりわけ具体的で明確な政体の観察には驚ろきました。名誉から、食器等の日常的な支出までが実に具体的に読み取れ、王侯の生活も武勲と栄光だけでなく、道化や賭博への対応の仕方にまで視野広く及び、大いに勉強になりました」という、現政権の批判・中傷には数多くの言葉を費やしたパンフレのたぐいは無数にあっても、かの「ユートピア」の具体像に迫る「ありうべき政体の精密な描写」にまで突っ込んだ具体的建白書がほとんど皆無であったこの時代の政体論にひとこと触れたかったという筆者の願望への励ましのお手紙が、たいそう背中を押してくださったのはいうまでもない。しかし「政体論」の歴史的 position づけの検討に手を伸ばす段階で、筆者がどのような迷路に踏み込んでしまったか、悟るに時間は必要なかった。当初の予定では、「検討篇」はまず、チュルケの政治思想にいたるまでの政治論を概略的に紹介し（「紹介」といってもほかの研究者のみなさんにはすでにご承知のところだと思ったが、筆者の心覚えのつもりでの自分自身に向けた「紹介」である）、そののちに「要約篇」が続き、それを受けて本論たる『貴族・民主制的君主制』の形式的オリジナリティ（要するに記述が細部にまで及んでいるということだ）と、それと不可分な実態的オリジナリティ（ほかの政体論と比してのオリジナリティ）を論ずる章を立て、最後に『貴族・民主制的君主制』が惹起した非貴族的・非民主主義的絶対王政論者の反論と、チュルケによる再反論を提出し、その論争の非生産性となぜこのような愚かな論争にチュルケ自身が陥ってしまったかを考察するはずであった。そして「検討篇」から「本論」、そして「本論」をめぐる、イエズス会士たちの誹謗中傷を受け、彼らに対する反論を同位相の中傷的パンフレのレヴェルにまで貶めるにいたる、高度に具体的で実現可能性を目指した『貴族・民主制的君主制』論争の、尻すばみに終わった「最終的局面」を描く過程で、宗教改革からリーグ派戦争を経て、やがて絶対君主制へと国制・心性が展開してゆく中で、この政体論が持つ意味を検討し結論づけ

る、筆者の特殊フランス16世紀思想史論を述べる予定であった。この特殊フランス16世紀思想史の補論として、チュルケの『貴族・民主制的君主制』以外の著書、なかんずく、コルネリウス・アグリッパの『諸学の虚妄について』<sup>9)</sup>、ビベスの『女子教育論』<sup>10)</sup>のチュルケによる翻訳、および本稿で略述する『スペイン史』をめぐる考察を紹介、筆者が考える「特殊」フランス16世紀思想史の「特殊性」がどこにあるのか、文章にしてみたいと考えていた。このうち『諸学の虚妄について』は、『貴族・民主制的君主制』「要約篇」を書いた翌年の、『フランス16世紀読書報告(1995)』に掲載した「迷信妄想」と銘打った雑文でいささか触れ、また「検討篇」の序論に設定していた「前史」の一部は中央大学の紀要『仏語仏文学研究 29』に「気の済むまで書いていい」と言われて我儘に掲載させていただいた、「『フランス16世紀読書報告(1996)』別巻」という総題のもと、その前半に「I. チュルケ・ド・マイエルヌの政体論とその周辺(II)——検討篇(1)——」という小タイトルをつけて投稿した。「検討篇(1)」とは、「前史」を読み漁っているうちにどこを起点としてよいのか分からなくなってしまい、時代を大きく戻ってパドヴァのマルシリウスから始めたくなり、「果樹園の夢」を経て、聖バルテルミーの前夜にようやく、きわめて独断的に、駆け足ながら辿りついたという、緻密さも奥深さも欠いた、はなはだ研究者らしからぬ妄想の作文になってしまったからである。『メモワール・ド・コンデ』<sup>11)</sup>が数多く収める第一次宗教戦争から第三次宗教戦争の論争諸論は「検討篇(2)」に、『シャルル9世治下のフランス事情覚書』<sup>12)</sup>に多く収められた聖バルテルミー前後の政治論議やパンフレのたぐいは「検討篇(3)」に、『メモワール・ド・ラ・リーグ』<sup>13)</sup>に収録された論争文書、さらにリーグ派のルイ・ドルレアンを筆頭とする反王権派や王権擁護論は「検討篇(4)」に、たとえば『ソルダ・フランセ』<sup>14)</sup>の名前が浮かぶ、アンリ4世治下の混濁した政争は「検討篇(5)」としてお目にかける予定

であった。ところが大幅にページ数を浪費した雑文の掲載に嘔みついたのが、ほかならぬ法学部フランス語部会の故藤井寛であった。「どれだけ書いてもいいという約束じゃなかったですか」という筆者の愚痴に、珍しく声を荒げた藤井は「いろいろなところに書く場があるという意味だ」と叱責した。筆者は騙されたという思いとともに、今後書く場所を失ったという口惜しさが募り、チュルケの政体論には二度と触れまいと決心した。その気持ちは、いまはもう取り返す時間のない、66歳をとうに経た現在にもつながっているし、フランス国立図書館の文献を起こして製本することを生業としているリプリント業者が一次史料としてこの政体論を2分冊の形態で販売しているので、やがてレトワルが絶賛した政体論を本格的に分析総合する研究者にも恵まれるであろう。しかし『スペイン総史』はどうだろう。むしろスペイン史家の領域で探索がなされるかも知れないが、その場合でもおそらくマリアナの『スペイン通史』経由ではなかろうか。であればレトワルにも相手にされなかったチュルケが浮かばれまい、という非学術的な思いが募り、奉職している大学の紀要に、大学人生活の最後になって、本稿の連続掲載をお願いした次第である<sup>15)</sup>。——余計な思い出に筆が走りすぎた。本論に移るとしよう。

## 0-2. 参 照 文 献

本論に入るまえにもうひとつ。註はすべて各章の末尾に後註としておいた。したがって本稿が未決のまま在任期間が過ぎてしまえば、その内容と註は読者のご想像に任せるか、あるいは直接筆者にお尋ねいただきたい（一応原稿の完結を予定しているが）。また煩瑣をさけるため、引用註・言及註は前後の文脈で判断可能と思われる場合、〔 〕にページ数、もしくは紙幅ナンバーを記すにとどめた。

「はじめに」への筆者註

- 1) ファン・デ・マリアナ [Juan de Mariana, 1535-1624]。専攻論文である Guenter Lewy, *Constitutionalism and Statecraft during the Golden Age of Spain: A Study of the Political Philosophy of Juan de Mariana, S.J.*, Droz, 1960。そして、これは研究書ではないがイエズス会士を尋ねるには必須の事典である、Carlos Sommervogel (éd.) *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, Second Impression, Martino Publishing, MDCCCXCIV。そして何かと重宝なピエール・ベールの『歴史批評事典』(Pierre Bayle, *Dictionnaire Historique et Critique*, Quatrième Edition, Amsterdam, MDCCXCVV (関連項目は「第4巻」327ページ以降)をのぞくと、筆者の書架にも中央大学図書館にも適切なマリアナ論が見当たらなかったもので、本註下記2. にあげたムーアの『王ノ教育』に施された長大な「序論」を参考にすること多大であった。
- 2) 『王ノ教育』[Juan de Mariana, *The King and the Education on the King (De Rege et Regis Institutione)*, An English Translation and Criticism by George Albert Moore, Country Dollar Press, 1947]。筆者はラテン語が出来ないので、スペイン語訳をのぞくとゆいいつの近代語版である、ムーア編訳のこの英訳書に頼った。
- 3) Cf. Richard Simon, *Histoire critique du Vieux Testament*, Nouvelle édition par Pierre Gibert, Bayard, 2008, *passim*; id, *Histoire critique du texte du Nouveau Testament*, Reinier Leers, 1689, *passim*; id, *Histoire critique des Versions du Nouveau Testament*, Reinier Leers, 1690, *passim*; id, *Histoire critique des principaux commentateurs du Nouveaux Testament*, Minerva GMBH, 1969 (1993), *passim*.
- 4) ここで筆者の手元にあるマリアナの『スペイン通史』の版をあげておく。*Joannis Marianae Hispani e Societate Jesu Historiae De Rebus Hispaniae Libri XXX*, Typis Balthazaris Lippi, impensis heredum Andreae Wecheli. Anno MDCV; Juan de Mariana, *The General History of Spain from the First People*, Tlanslated from the Spanish by Capt. John Stevens, London, 1699; Juan de Mariana, *Historia General de España*, in Biblioteca de Autores Españoles, Obras del Padre Juan de Mariana, Madrid, 1950. 2 vols.; *Histoire generale d'Espagne du P. Jean de Mariana*, Traduite en Français par le P. Joseph -Nicolas Charenton, Paris, MDCCXXV, 6 vols. 筆者が底本としたのは最後にあげたフランス語訳である。
- 5) チュルケの『スペイン総史』で参照にした版は、*Histoire Generale d'Espagne, comprise en XXXVI livres*, par Loys de Mayerne Turquet, Lyonnois, Samuel Thiboust, MDCXXXV, 2 vols.; *The Generall Historie of Spaine*, written in French



- by Lewis de Mayerne Turquet, unto the yeare 1583, London, 1612. 底本としたのはフランス語原著である。
- 6) レトワルの諸版をあげるのはここでの目的ではない。底本とした版だけ記しておく。*Mémoires-Journaux de Pierre de L'Estoile*, publiées par Brunet et alii., Alphonse Lemerre, 1881-1896, 12 vols.
- 7) 筆者が参考にしたのは, [Jean Morely,] *Traicté de la discipline & police Chrestienne*, Slatkine Reprints, 1968 (MDLXII) である。
- 8) 底とした版は, Loys de Mayerne Turquet, *La Monarchie aristodemocratique, ou le gouvernement compose et meslé des trois forms de legitimes Republicques*, Paris, MDCXI (大英図書館所蔵のマイクロフィルムからおこしたもの) である。
- 9) 底とした版は, *Paradoxe sur l'incertitude, vanité et abus des Sciences*, Oeuvre qui peut profiter, et qui apporte merueilleux contentement à ceux qui frequentent les Cours des grands Seigneurs, et qui veulent apprendre à discourir d'une infinite de choses contre la commune opinion, Traduit en François, du latin de Henry Corneille Agr. [par Loys Turquet de Mayerne], 1603である。
- 10) 筆者が参照にしたのは, Jehan Loys Vives, *Livre de l'Institution de la Femme Chrestienne*, nouvellement traduitz en langue François par Pierre de Changy, Lemale et Cie, MDCCCXCI (1542) である。
- 11) 参考にした版は, *Memoires de Condé, ou Recueil pour servir a l'Histoire de France*, Augmentés d'un grand nombre de Pièces curieuses, qui n'ont jamais été imptimées, & enrichis de Notes historiques & critiques, Londres/Paris, MDCCXLIII, 6 vols. である。
- 12) 参考にした版は, *Memoires de l'Estat de France, sous Charles Neufviesme*, Seconde Edition, Meidelbourg, MDLXXVIII, 3 vols. である。
- 13) 参考にした版は, [Simon Goulard (éd),] *Mémoires de la Ligue*, Nouvelle Edition, Amsterdam, MDCCLVIII, 6 vols. である。
- 14) ここで念頭に置いているのは, *Le Soldat françois*, revue & corrigé des fautes survenues aux precedents impressions, derniere edition, s.l., MDCIII. などに代表されるパンフレ群である
- 15) 筆者はラテン語ばかりでなくスペイン語・ポルトガル語にも疎いので, 本格的なスペイン史家の方からのご批判は覚悟もしているし, もし本当にご批判をいただけたら, 老齢で先行き短い身ながら勉強をさせていただく機会を与えられ, まことの幸甚に思うだろう。わずかに参照した, マリアナとチュルケの重なる部分の概説書としては, E. Lévi-Provençal, *Histoire de l'Espagne musulmane*, Nouvelle edition revue et augmentée, 3 vols., in 4°, Paris/Leidenが

通読して得るところが多かったうえ、素人にはたいそう面白かった。その他の文献は日本語訳だが、D. W. ローマックス、『レコンキスタ』、林邦夫訳、刀水書房、1996年；W. M. ワット、『イスラーム・スペイン史』、黒田壽郎・柏木英彦訳、岩波書店、1976年を筆頭にあげよう。それらの解説に掲載された「基本参考文献」は目を通していない。出来の悪い「フランス16世紀屋」の限界だとうござ承いただきたい。わが法学部名誉教授真田芳憲氏のお仕事も碩学の誉れ高い井筒俊彦氏のお仕事も斜め読みし、イスラム学の深さを思い知っただけにとどまった。大学人の末席を汚す者としては恥ずかしさが募るばかりであるが、これも質の低い怠惰のなせる業である。反面教師とされたい。

## 1. 復習：著者について

### 1-1. チュルケの経歴と著作

さきに述べたようにルイ・チュルケ・ド・マイエルヌに直接触れた文章については1本、チュルケを射程に入れた雑文についても1本、さらにチュルケが関係した文章もふくめると、これまで3本の拙文を綴ってきたが、そのどれもが専門家（少なくともチュルケの人物を知る）を説得し、筆者の作品論を訴える目標に添っていわば点的に書かれたものであって、チュルケの作品群についてはいささか筆を割いた覚えはあるが、時間的・線的にそうした作品群を繋ぐ、その略歴を述べた記憶はない。それというのもレトワルの高い評価を別にすると、17世紀、18世紀、19世紀にそれぞれ憧憬の眼差しとともに、ときにより隆起した16世紀ルネサンスの波にも洗われず、忘却の深淵に沈殿していた。たとえば17世紀に初版を出し、ピエール・ベールから徹底的に不首尾を突かれ、その後1759年の10巻本で最終的な改正をほどこし、質はともあれ量では恥じぬようになった通称『モレリの大歴史事典』<sup>1)</sup>でも、『スペイン総史』についてはその標題と形状のみを知らせ、『貴族・民主制的君主制』についてはこれをユニウス・ブルトゥス〔この同定はモレリによる〕の『ウィンディキアエ』の翻訳に過ぎないと断じ、18世紀の歴史主義の限界（はたまたイエズス会版の歴史の批評の限界か）

を露骨に示している〔VII.379 r°〕<sup>2)</sup>。19世紀のウフェール<sup>3)</sup>はさすがにその愚を犯してはいないが、ラングレ〔・デュ・フレノワ〕の「この歴史書は、部分的には〔筆者註：チュルケが1618年に没し、『スペイン総史』の最終第3版の刊行が1635年であれば当然のことだろう〕マリアナの史書に基づいており、マリアナと比べるとより浩瀚になっているとしても、それだけ正確になっているというには程遠い」という評にまかせ、みずからの評価は下していない。同じく19世紀の事典ではあるが、チュルケが属したフランス改革派教会と同じ立場に立つアーグ兄弟篇の『フランス・プロテスタント』<sup>4)</sup>はもっと奥ゆかしい。かつておかしな自らの遺漏をただすべく、自前の年譜を作成する代わりに、この事典の、「マイエルヌ（ルイ・ド）」の項目の中から、前半の、わたしたちのチュルケに限った文章を全訳してみる。

マイエルヌ（ルイ・ド）、通称チュルケ<sup>（原註1）</sup>。翻訳家、歴史家、パンフレ作家。伝えられるところでは、年代は不特定ながら、リヨンで、ピエモンテ出自の家系に生まれた。聖バルテルミーの日ののち、この都市を去り、ジュネーヴに引きこもり、1573年3月16日に住民として受け入れられた。その後リヨンに戻り、改革派教会の長老に任命された。ソミュールとジェルジョーの全国教会会議に参加したのは、この資格においてであった。ピエール・ド・レトワルの『日記』が教えるところでは、チュルケは1608年にパリに赴いた。チュルケはレトワルに、その『国王が召集することを望まれるであろう全国宗務会についての見解』の一篇を捧げている。この『見解』は、全国教会会議の開催によって教会を改革し、このような手段でカトリック教徒と改革派信徒の接近を目論むために、自分なりにもっとも適した方途を披歴した小冊子である。レトワルはこの『見解』を評して、「神聖にしてキリスト教的であり、本当に何ものにも束縛されていない心により作

製された、真理を愛する者の手になる」ものであると言いつつ、なかなか受け入れられないだろうと予言した。事情は予言どおりになって、マイエルヌは宗教上の問題を断念し、政治学に没頭したが、事態はいっそううまく運ばなくなった。『貴族・民主制的君主制』という書物が上梓されるやいなや、この本は没収され、発売禁書処分となった。〔エリ・〕ブノワが報告するところでは、著者であるマイエルヌ自身、別のところに安全を捜さなければならなかった。しかしながら、数年後、彼はパリに戻ることを許可され、その地で1618年に没した。彼の葬儀はサン・ペール街の改革派墓地で4月1日に執り行われた。

原註（1）：チュルケというこの名前は、その祖先の女性のひとりがその美貌ゆえ、「麗しきトルコ人〔la belle turque〕」と渾名されたために由来したと主張されている。〔ビエール・〕パールに基づけば<sup>5)</sup>、この家系はチュルケと呼ばれ、マイエルヌという名前はジュネーヴ近郊の苦屋に由来していた。わたしたちとしてはパールがもっともなことを言っていると諸手をあげて賛成したいところだ。このチュルケという名前のもと、ルイ・ド・マイエルヌはジュネーヴの住民票に登録され、全国宗務会証書に記載されている。

チュルケの著書としては、

- I. 『宮廷を疎んずること〔、ならびに田園生活を称揚すること〕』、アントニオ・デ・ゲバラの仏訳。ジュネーヴ、1574年<sup>6)</sup>。
- II. 『キリスト教徒の女性の教育』、ファン・ルイス・ビベスの仏訳、リヨン、1580年、16折判。
- III. 『諸学の不確実性、虚妄および誤謬をめぐる逆説』、コルネリウス・アグリッパのラテン語原文からの仏訳、出版地を隠したまま1582年、8折判、パリ、1603年、12折判、1617年、12折判。
- IV. 『交渉、取引もしくは契約を論ず』、ジュネーヴ、1599年、8折判<sup>7)</sup>。

V. 『スペイン総史』, リヨン, 1586年, フォリオ判, 第2版, パリ, 1608年, 第3版年, 1635, 2分冊, フォリオ判。英語訳, ロンドン, 1812年。初版は全27巻に分けられている。1608年版は全30巻に分かれ, 1582年の年末までを覆っている。第3版はさらに6巻を増刊され, 16世紀の末年まで及んでいる。

VI. 『貴族・民主制的君主制, もしくは3種類の正統的な国制から構成され混合された政体』, パリ, 1611年, 4折判。全国身分会に捧げられている。〔以下, この項目中にレトワルの同書についての感想が8行ほど引かれているが, 上記拙論で既述したことでもあるのでここでは略す。〕実際この書物は上梓後数日にして押収され, 断罪された。しかしいったいなぜ, 〔マリー・ド・メディシスの〕摂政時代にこの著者は, 政権を子供や女性に任せるべきではないと主張するまで大胆だったのだろうか。高等法院の判決ののち, ギイ・パタンが「かつてのリーグ派で, 風見鶏のような悪漢」<sup>8)</sup>と評しているルイ・ドルレアンが, この禁書を足蹴にしようとした。マイエルヌは彼の愚かな攻撃に, 以下の文書をもって敢えて答えようとした。

VII. 『貴族・民主制的君主制の誹謗者たちへの抗弁』<sup>9)</sup>, 1616年, 12折判, 1617年, 8折判。

〔以下, 本来は全文を掲げるべきであろうが, 当面の論題から逸れ, チュルケの縁者子孫に関する記述へと文脈がつづくため, 略す。〕

アーク兄弟の名著に対する補足の名に値するかどうか心もとないが, モレリの『大歴史事典』の最終版を尋ねると, さらに逸話的に, 聖バルテルミーの奇禍にあって2件の館を焼かれたことが, チュルケのリヨン逃散の直接の契機となり, 亡命先のジュネーヴでアントワーヌ・ル・マソンの娘で妻のルイーズとの間に, 人名録風にはこちらの方が著名な医師テオドー

ルをもうけたということなどが漏れ聞こえる。

それはともあれ、上記の引用からも知れるように、チュルケに対する市井の注目は主として『貴族・民主制的君主制』に向けられ、ついで前世紀のアナール学派の鼻祖リュシアン・フェーヴルもコルネリウス・アグリッパを指示するにあたって原著のラテン語版よりもむしろ底本として依拠している『諸学の虚妄について』の仏語訳、ついで『スペイン総史』がよく読まれた（読まれている）というべきであろう。チュルケが仏訳したといわれるアントニオ・デ・ゲバラや、ファン・ルイス・ビベスの訳書は、ほかの訳者の手になる仏訳書が耳目を集めた所為か、それとも出版地やおそらく部数的にいて少数の刊行であった（らしい）ためか、フランス国立図書館にも所蔵されているかいないかという現状である（電子カタログによれば、ゲバラのチュルケ訳は異なる版のそれぞれ、計2冊、ビベスのチュルケ訳は1冊のみ）。近年のフランス本国、およびジュネーヴ、その他の地での16世紀から近世初期にわたる関心の高まりにあってさえ、ゲバラのフランス語訳の批評版は基本的に16世紀に定評のあったアントワヌ・アレグル仏訳と、ゲバラによるスペイン語原文を掲載し、チュルケの訳書についてはわずかに「序文」を引くだけで、解説らしい解説はほとんどない。それはともあれ、上記のアーグ兄弟の記載をより細かく補足しておくことは、あとから来たものの責務であろう。『諸学の虚妄について』や『貴族・民主制的君主制』など、過去に触れた文献や論争をのぞいて、以下に入手できた史料の範囲内で、『フランス・プロテスタント』の記事の出典のいくつかを明らかにしておきたい。

## 1-2. 補 註

まず、『フランス・プロテスタント』の「その後リヨンに戻り、改革派教会の長老に任命された。ソミュールとジェルジョーの全国教会会議に参

加したのは、この資格においてであった」という文言をめぐって。この情報は1710年2分冊で刊行された『フランス改革派教会全国宗務会全記録』<sup>10)</sup>で確認することが出来る。浩瀚な史料をひとつひとつ解説することは現状では不可能であり、また可能であったにしても各宗務会の内容を紹介することは本論とは大きく外れるのでここでは差し控えるが、「1596年6月3日から16日までソミュールで開催されたフランス改革派教会第14回全国宗務会」の項目の出席者名簿第九項に、『リヨネ、フォレ、ボジョレ各地域を代表して、リヨン教会の長老ルイ・チュルケ殿』〔I.195〕といった記載が、また「1601年5月9日から25日までジョルジョーで開催されたフランス改革派教会第16回全国宗務会」の項目の出席者名簿第13項に『リヨネ地区を代表して、リヨン教会長老ルイ・チュルケ殿』〔I.234〕といった記載が見られるのである。

加えて「ピエール・ド・レトワルの『日記』が教えるところでは、チュルケは1608年にパリに赴いた。チュルケはレトワルに、その『国王が召集することを望まれるであろう全国宗務会についての見解』の1篇を捧げている」の前提として見受けられるのはレトワルの『日記』の「1608年10月3日金曜日」が教える以下の記事である。《3日金曜日。チュルケ殿がわたしに逢いに来て下さり、お約束されていた、全国教会会議により教会を統合し、改革するにもっとも適切な処方について書かれたご自身のご意見を持ってきてくださった。それは6枚の紙葉にわたる『国王が召集することを望まれるであろう全国宗務会についての見解』と銘されたものであった。神聖にしてキリスト教的であり、本当に何ものにも束縛されていない心により作製された、その著者がそうであるように、真理を愛する者の手によって産まれているものである。しかしけれども、わたしが判断するところでは、上記の真理ゆえに（真理に依拠しようとしても、これは今日では<sup>こんにち</sup>はなほだ人気がなく、影響力を失墜しているのだが）、なかなか受け入れられ

ないであろう。この見解は一方のひとびとには認められても、かかる提案に同意するにはあまりにも利害関係を有しすぎると主張する他方のひとびとからは、必ずや棄却されるであろう》〔IX.138〕。レトワルの『見解』をめぐる記述はこれだけで、チュルケがそれをレトワルに「捧げている」という語句の出典は分からなかった。『見解』は現存していないと思われるが、レトワルの『日記』以外にも言及する文献があったのかも（あるのかも）知れない。論者の不明をお詫びするばかりである。

ところでレトワルとチュルケの結びつきは上記に限られたものだけではない。『貴族・民主制的君主制』への高い評価については別言したので繰り返さないが、じつはレトワルはチュルケの『スペイン総史』も入手していたのである。本来はこのさきの『スペイン総史』の位置づけの章で言及してもよかったのであるが、その言及がまさしく言及するだけの範囲にとどまり、それよりもむしろチュルケの人物評にかかわるところなので、レトワルを引き合いに出した構図上、ここで援用しておきたい。時は同じく1608年、時期は戻って9月24日水曜日の記事である。そこには以下の文章が見られる。《24日水曜日。『スペイン総史』の執筆者で博学で優れ、教会の統一と改革に大いに熱意を持っておられる人物、チュルケ殿がわたしに逢いに來られた。わたしの書齋でこの話柄をテーマに話はじめられ、わたしが存じ上げなかったことがらがいっぱい詰まった、この統一と改革をめぐる問題について教えてくださった。それらはこの大切な作業の方向づけにふさわしいもので、志しあるひとびとならだれでも望んでいることだと思う。そしてわたしに、かつて、この件についてジェルジョーの宗務会にご自身が送付された、ある『見解』を見せてくださるという約束をしてくださった。この宗務会で国王は、これに成功する手段を提案させ、ことさら論じさせようと願っていたようだ（しかしその願望はまもなく国王の頭から抜け落ちてしまった）》〔IX.133〕。



さらにこの『日記』はアーグ兄弟が触れていない文書についての指摘もある。1608年4月19日土曜日、《この日、PD.L.P. 殿〔未詳〕がわたしに、立派な御仁であるチュルケ殿の手書きになる、はなはだ蒐集に値し、自由闊達である『政治的逆説集』を下さった》〔IX.67〕。この『逆説集』も散逸した文献と思われる。

『フランス・プロテスタント』で言及されるもう1人の名前を捜してみよう。すなわちエリ・ブノワである。その大部な4折判5巻本の『ナント勅令史』<sup>11)</sup>は残念ながら一次史料としては扱えないながら、執筆年代をこえた、高い学術性に大きな評価を与えられ、ためにアーグ兄弟もその記事を援用したのだと思う。ブノワの問題の文章は以下のごとくである。時期は1610年（～1611年）の全国身分会開催時である。「この会議の最中にもさまざまな文書が出現し、その噂が飛び交った。マイエルヌも1篇の著作を世に送ったが、王妃〔マリー・ド・メディシス〕の厚遇を獲得するにふさわしいものではなかった。マイエルヌはその著書で政権には断じて婦女子を関与させざることと力説したのである。これは、未成年のあいだ国王にもっとも血統に近い王族に摂政権をゆだねる、この君主国の古来の法には適っていたが、1, 2の逆の例が王族をこの役職から遠ざけてはいた。そうした王族は自分たちの身分を維持するにはあまりに貧しかったか、あまりに勢力がなかったのである。この文書は断罪され、その著者はどこかほかの土地に身の安全を捜しに行った」〔II.71〕。

記述の順序は前後するが、聖バルテルミーのさいにジュネーヴに亡命したチュルケが1573年3月13日に市民の資格を授けられた、という一節も現代では容易に確認できる。ガイゼンドルフ編纂の『ジュネーヴ市民登録簿』<sup>12)</sup>の当該年度の当該日時に、ジュネーヴ市民であるアマデイス・デュ・メニルとジャン・ド・ランを立会人とした、《リヨンのルイ・チュルケ〔Loys Turquet, de Lyon〕》〔II.76〕という名前がはっきりと読み取れる

からである<sup>13)</sup>。

最後に大物が残っている。いうまでもなくピエール・ベールである。『フランス・プロテスタント』は座興程度にしか引かないが、ベールの事典の記事はけっして無視してよいものではない。いままで『フランス・プロテスタント』の記事に依拠しながらさまざまに述べてきたが、本当をいえばその大半はベールの文章の剽窃なのである。このベールの項目はもともとルイ・チュルケの子息テオドールに捧げられたものであり、テオドールの項目それ自体、『歴史批評事典』においては相対的に短い記事であって、ルイ・チュルケに宛てられた案内・考察はさらに部分的なので、煩瑣を恐れず、関連する全文を訳出してみる。底本は上述した版である<sup>14)</sup>。

- (A) ギイ・パタンはこの論争〔筆者註：テオドールとパリの医師との間の〕に言及したが、悪口という癖をもつ、革新的な医師の敵としてであった。「マイエルヌ殿は」、と彼は『書簡集』第1巻35ページに収められた1645年11月16日付第8書簡で述べている、「英国王薬師で、わたしが知っている限りでは、今日こんにちフォリオ判2巻本で刊行されている『スペイン総史』〔…〕を執筆した人物の息子として、ジュネーヴに生まれた。この父親は『貴族・民主制的君主制』と題された1巻の書物を書いたが、リヨンとパリで印刷された『人間植物論』の著者ルイ・ドルレアン（タキトゥスの注釈を執筆した御仁である）によって反駁された。チュルケは1617年にルイ・ドルレアンに反論書をしたためた。彼はジュネーヴ、もしくはその近郊にとどまり、この国の宗教〔筆者註：改革派〕をいただいていた。〔…〕触れておかなければならないのは、リヨンのひとルイ・ド・マイエルヌが執筆した『スペイン総史』は最初に1587年に印刷され、それから1608年にパリのアベル・

近世初期におけるもっとも古いスペイン通史について（その1）

ランジュリエ書店で、さらに1635年、同じ都市のサミュエル・チブー書店で印刷されたということだ。第2版は30巻からなり、1582年の終わりまで継続し、第3版はさらに六巻を増補され、16世紀の最後まで伸びている。[…]

- (B) わたしはミニュトリ猓下からいただいた情報をそのまま移すことにしよう。猓下はわたしの懇願に状況のすべてを入念に教えてくださるというご厚意で答えてくださった。「テオドール・マイエルヌは[…]自身が執筆された『スペイン総史』、および全国身分会諸氏に献じた『貴族・民主制的君主制』ゆえにはなはだ著名なルイ・ド・マイエルヌと、フランソワ1世とアンリ2世王のピエモンテ地方戦費財務官アントワヌ・ル・マソンの娘ルイズとのあいだの子息だった。この家系はピエモンテ地方を出自とし、キエル市で長きにわたって栄えていた。チュルケという名前、あるいは渾名は、この家のひとりの主婦が、見栄えが良かったためか、体格が立派だったためか、美しいトルコ女のようにと評判になった。これがその子供たちみなにチュルケッティというあだ名が一様に与えられるようになった謂われである。ルイ・ド・マイエルヌは〔筆者註：改革派の〕宗教のためにリヨンで2件の館を壊され、1572年の暮にジュネーヴに亡命した。1573年9月28日に、ジュネーヴでテオドール・ド・マイエルヌが誕生したが、代父はテオドール・ド・ベーズであった。[…]

### 1-3. ささやかな疑問

『フランス・プロテスタント』の「マイエルヌ（ルイ・ド）」をめぐる記事と数点の論者の側にある史料とを対照させた結果、その渉猟性、説得力は、この事典の19世紀後半という発行年度を考慮すれば、際立っていると

いえよう。フランス19世紀は歴史主義の時代であると嘯かれることは周知のとおりだが、ミショーやウフェールを経て、フランス改革派の総力を結集した成果であろうことに疑いはない。エリ・ブノワが当時の改革派学識者に必須の文献だとしても、立ち向かう者の足を竦ませる膨大な『ナント勅令史』から、索引にもその名を見出すことができないチュルケの勇み足を尋ねあてる執念は、並大抵のことではなかったに違いない。最後にアーグ兄弟の事典には触れられていなかったある疑問を提出して、『スペイン総史』の入り口とでもいうべきチュルケの経歴と著作の項を閉じることにしよう。

ではその疑問とは何か。端的に言って、チュルケのスペイン趣味である。ビベス、ゲバラ、『スペイン総史』と、その代表的翻訳であるコルネリウス・アグリッパの『諸学の虚妄について』および後世にその名を伝えさせた『貴族・民主制的君主制』（さらにはその論争か）をのぞく翻訳の原著、そして生涯の著作はスペインの相貌を覗かせているのである。もちろんフランス16世紀を代表するゲバラの仏語訳、ビベスの仏語訳はと問うとしたら、チュルケ以外の名前があがるのはその出来栄えからして、当然といえよう。しかしなぜ数ある宮廷批判の書からゲバラの詩作を選んだのか。なぜビベスの女子教育論なのか。そしてフランス人にもかかわらず、なぜ『スペイン総史』だったのか。現段階では問うても解けないこの疑問を頭の片隅にとどめ（結論を先取りすればわたしの知識では推測すら叶わなかったし、設問を後代の優れた研究者にお任せしたいが）、いよいよ大作『スペイン総史』に分け入ることにしよう。

#### 第一章「著者〔すなわち、チュルケ〕について」への筆者註

- 1) Mr. Louis Moréri, *Le Grand Dictionnaire Historique ou le mélange curieux de l'histoire sacrée et profane*, Slatkine Reprints, 10 vols., 1995 (1759) の Mayerne の項を参照。

- 2) 素人の出しゃばるところではないかも知れないが、『ウィンディキアエ』の著者をめぐっては過去いく人もの専門家が「決定的」な同定をしてきた。ピエール・パールの長大な論考は有名だが、これに真っ向から反論する城戸由紀子氏の論説は耳目に新しい。ステファヌス・ユニウス・ブルトウス著、城戸由紀子訳、『僭主に対するウィンディキアエ』、東信堂、1998年を参照。
- 3) Hoefer (éd.), *Nouvelle Biographie Générale*, Firmin Didot, MDCCCLII-MDCCCLXVI, 56 vols. のMayerneの項を参照。
- 4) Eugène et Emile Haag, *La France Protestante*, Slatkine Reprints, 10 (11) vols., 1866 et/ou 2004, (1846-1859 et/ou 1877-1888). 補足すると、スラトキンは1966年に『フランス・プロテスタント』の初版10冊を復刻し、絶版になったのち再版11冊を復刻した。しかし増補改訂された再版の『フランス・プロテスタント』は途上で挫折した。したがって現在復刻刊行されている事典は前半が増補改訂版を、後半が初版を受け持っている、いわば折衷事典である。幸か不幸か「マイエルヌ」の項は増補改訂が間に合わなかったものである。
- 5) パールの陳述の出典については、何度も版を重ねているので、どの版をさしているか分からないが、筆者が参照したのは、Pierre Bayle, *Dictionnaire Historique et Critique*, *op.cit.*
- 6) 論者が参照したのは、Antonio de Guevara, *Du mespris de la court & de la louange de la vie rustique*, édition critique par Nathalie Peyrebonne, d'après la traduction d'Antoine Alaigre (1542), Classiques Garnier, 2012.
- 7) 参照したのは、〔Loys de Mayerne de Turquet,〕 *Traicté des Negoces et Traffiques, ou Contracts*, Jaques Chovet, MDXCIX (パリ国立図書館蔵の圖書のマイクロフィルムをおこしたもの)。
- 8) Cf. Guy Patin, *Lettres choisies de feu M. Guy Patin*, 5 vols in 2, Reinier Leers, MDCCXXV, t.1, pp. 24-25 (Lettre VIII).
- 9) 参照したのは、L. De Mayerne, *Apologie contre les detracteurs des Livres de la Monarchie Aristodemocratique*, s.l., 1616. 大英図書館のマイクロフィルムをおこしたもの。
- 10) 底としたのは、*Actes Ecclesiastiques et Civils de Tous les Synodes Nationaux des Eglises Reformées en France*. En 2 volumes, La Haye, MDCCX.
- 11) 〔Eli Benoist,〕 *Histoire de l'Edit de Nantes*, 5 vols., Delft, s.d.
- 12) Cf. Paul-F. Geisendorff (éd.), *Livre des Habitants de Genève, t.II, 1572-1574 et 1585-1587*, Droz, 1963.
- 13) 実は『フランス・プロテスタント』が沈黙しているチュルケの手になる建白書が一点残っている。Loys de Mayerne, Turquet, *Epistre au Roy, presentee à*

*sa Majesté au mois d'octobre 1591*, Tours, MDCXII. (わたしたちが参照したのはパリ国立図書館蔵のマイクロフィルムをおこしたもの)

14) Pierre Bayle, *op.cit.*, t.III. pp. 279-280.

## 2. 推移と変遷：歴史の時間への配慮

『スペイン総史』は2通の献辞を戴いている。1通はアンリ3世へ捧げられた、ごく形式的で、時代の献呈の修辞に添ったもの。いま1通は「フランス重臣、第1位の王族、ナバラ王アンリ3世（のちのフランス国王アンリ4世）」に献じられたもの。後者には1586年8月15日の日付があり、わずか3ページにすぎないが、盛り込まれた内容にはそれなりの思想がある。献辞につづいて長大な「序文〔Preface〕」がおかれ、執筆の動機や出典などが綴られている。それに1ページの「書肆から読者へ」と銘された弁明の辞が掲載され、「第1巻」へと稿渡しをしている。いまの時点では主題や典拠にかかわるこれらの献辞には触れず、「第1巻」から通時的に記事を追い、記述の特色について考えてみる。

### 2-1. 『スペイン総史』の端緒：始まり

本文に先立って、まず『スペイン総史』の標題が示され、その標題の下に、「古代と同じく近代の、さまざまな著者に依拠して蒐集された」と形容されている。

『スペイン総史』の各巻の巻頭には、その巻で詳述される内容の梗概が、項目立てをして、謂わば「目次」のように、まとめられている。こころみに「第1巻」の冒頭におかれた「概要」を訳出する。

1. スペイン人たちの古代にして最初の起源の不確かさをめぐる論説
2. 彼らの宗教

3. 彼らの言語
4. ヘリオンにいたるまでの、彼らの、実在したかもしれない、古代の、  
寓話的な国王、もしくはスペインを放浪する諸部隊の指揮官
5. ヘリオン
6. オシリス
7. 大ヘラクレス
8. スペインを侵略していた少なからぬ小規模な国王たち、もしくはイ  
タリア人海賊
9. こうした古代性についての不条理をめぐる論説
10. スペインをうかがい、いきり立つギリシア人
11. スペインを劫略し、取引を持ち掛けるアフリカ人たち
12. 聖ディオニュシオス
13. カキウスにより追放されるパラトゥウス
14. ギリシア人ヘラクレス
15. ハルホリスとその治世、およびその子息アビスの治世
16. スペインの土地を篡奪した民族の混乱と混合
17. ポエニキア人とその子孫であるガディトびと
18. アルガンボン
19. スペイン陸地部分の年代に添った描写
20. スペイン周辺の島嶼
21. ローマ人ならびにカルタゴ人、およびそののちに來た、アラビア人  
にいたるほかの諸民族による統治形態の判別
22. 現在では評判となっているスペイン諸王国の判別
23. 古今のスペインの肥沃さ
24. 古代スペインの慣習と、スペイン人が現在でも未だ守り続けている  
風習。スペイン人の武具と規律

第1節のスペイン人の起源を尋ねる章は（したがって『スペイン総史』そのものの初めは），論者の拙い訳文では伝わりにくいであろうが，以下のように（拙訳では到底伝えきれない）格調高い文章で始まっている。

（引用－1）〔I.1-2〕

はなはだ遠方からなされる諸民族の起源と古代性の搜索はいつも寓話によって霧に隠されてきたように思える。なぜなら世界史を執筆しようとする者，もしくは個別的な何らかの民族の歴史を執筆しようとする者の大多数は，その民族のさいわいのため，世界に欠けることのない作品を提供し，自分たちがその者たちのために筆を執っているひとびとを，いかなる時節も弁えず，記憶にとどめることなく素通りしてしまわないようにするのがふさわしかったからである。何ごとかを白紙のままに遺すことは，自分たちの研鑽を積んだ論議にもかかわらず，自分たちの無知や怠惰のあかしとなってしまうであろうと考えてのことだった。したがって莊重な著述家たちの証言そのものが欠けている場合には，この者たちは自身の自由な想像力の鎧を外したり，つまらないことに閑暇や労苦や能弁を捧げ，捏造者たちや嘘つきたちの跡についていったのである。こうしたことでなるほどこの者たちは詮索好きな精神をいささかは満足させたかも知れないが，読書し学習しようとしているひとびとを満足させるわけではない。なぜなら欺瞞というものは，年代の突合せがそれを露見させたり，被造物の影響力や結果を弁える精神がそれを棄却したり，あるいはわずかなりとも歴史の著述者が不確かなものごとを本当のことと思いなして，そのために自分の書物の厚さを増そうとする目的で，喜んで受け入れようとしたり，それを粉飾することに悦楽を見出したりことがはっきりするや否や，場合によっては修道士が誤用と糾弾するなどして，まるまると



巧みに隠しおおせるものではないように、時間を惜しむ勤勉な人間なら憤って、もはや嫌々ながらでしか読むことはない。したがってより健全な判断力を有するひとびとにとって歴史の主題は後世のひとたちによって知られるに価する真面目なことがらにおける純粋な真相であり、歴史を手掛けるひとびとに称讃や叱責をもって事例に興味を添えることを可能にし、人物にかかわりなく、また愛着にせよ憎しみによる、徳の鍵によってにせよ、もしくは悪徳への危惧に動かされてにせよ、いかなる感情にも切っ掛けを与えることなく、そのあとについて回る賞罰をはっきりとさせ、作家たちにより執筆されたところを読むであろうひとびとが、ある者たちの見事な勲しをつうじて立派に徳高く生きるべく教唆され示唆されたり、それ以外の者たちのまったく邪まな欲望から生ずる不名誉や、不仕合せをともなった成り行きによって道を踏み外さないよう示唆されるようにである。このことはそれらのひとびとが歴史の中にこうした真実の特性を認識すればするほどそうなのである。そして少なからぬものの記憶が埋葬されたり、さもなくばはなはだ誤謬に満ちて改竄されたりするものだから、民足の古代性というひとの気配のない闇の中にいるひとびとに、かよえる道に赴くために手探りしながらにせよ、何らかの路に注意しながらすすむのを禁ずるまでに厳格であったためしはなかった。そのひとびとが、いくらか似ていなくもない狼の道行きと犬の道行きを優れた猟師なら判別するはずであるということを思い出し、こうしたことを致し方なく行なうという条件で、判断力をもって行ないさえすれば許されるがためにそうなのである。

わたしたちが執筆しようとするスペインの歴史は、その他の歴史がほとんどすべてそうであるように、この意味で不完全なものである。なぜならカルタゴ人がこの陸地にやってくる以前、そして

ローマ人たちのさまざまな戦闘以前には、どのような民族によってスペインが占拠され、それがいつであったか、どのような政体で彼らが統治されていたか、はなはだ確実性の乏しい推論による以外、真相に辿りつくことが出来ないからである。なぜなら実際のところ、大洪水のあと大地に拡散した最初の人間たちの事績について、わたしたちには誰かといえばモーセしかないし、モーセは主として神の教会の建設に与る点に関して、ヘブライ人の国制と継承を論ずるに最新の注意を払っていたのだ。ほかの民族についてはことのついでに、それらの民族をつかってヘブライ民族に善きことを為そうとか、ヘブライ民族の忘恩のをせいで彼らを罰することを望まれたときに応じて、それらの民族について語っていないのである。したがってモーセのうちにスペインやスペイン人についての、わずかなりとも記録を尋ねてはならない。ギリシア人たちも、その他の民族についてはほとんど関心を寄せず、自分たちの民族をたいそう好んでいたのも、その他の民族については、軽蔑によるか、自分たちのための称揚を膨らませるためによる以外、敢えて語るか語らないかというありさまだった。この民族はときとしてラテン人に寓話を提供し、ラテン人たちの方では、古代性を鑑みて、ギリシア人の寓話をういたり、自分たちの推測を用いて、自分たちの事績を公けにするよう努め、現代人がやってきているのと同じようにふるまい、自分たちのローマやイタリアを飾り、豪華にしてきた。それでは一体わたしたちはかくも秘匿され確かでないことがらについて、どうにかこうにか受け入れられようかと思われるであろうそうした推論にいささかなりとも手を触れ、歴史家たちが初期教会について語っているところをすべて簡単に述べて、理性が要求する以上にかかる労苦に専念しないようにしよう。

本稿ののちの章で扱う予定の、「歴史」や「歴史記述」にまつわるさまざまな主題の展開の萌芽がすでに顔をのぞかせているが、それにはいまのところは留保しておこう。線の歴史性を尋ねる本章でまず押さえておかなければいけないのは、スペインの歴史の原点をおぼろげなままに遺しているという点だ。16世紀初期に固有な、イタリア系・フランス系の歴史家たちが陥りやすい「アエネイス伝承」にはここでは少しも顧慮されていない。「原初」の霧の彼方には敢えて追求を避けているのだ。たとえばこの姿勢は「霧の彼方」の言語についても私見を挿まないという1節にも貫通している。《わたしは彼らの最初の言葉が当時のビスカン族の言葉であったと考えているひとびとを論駁するのに手間暇をかけたくない》[13]。私見を挿んだとしても学術的な根拠を示さない、あるいはチュルケ自身は有していない「想像世界」である。たとえば古代スペイン人は一定程度の文明を有していたという断言に論駁しては《原初スペイン人については、彼らが単純さや無知、貧困以外の立派な宗教や学問、政体が存したということ、わたしたちはそうしたことを殆ど信じていないし、礼儀や勤勉、ものごとの価値や有益性の経験と知識は、彼らにとって時間を経るにつれて諸芸の女主人である必要と、フェニキアやエジプト、ギリシアやカルタゴ、ガリアやその他の地の、その者たちの地からあふれ出た異国人とによって、教えられたのである》[id]。つまりこの文章でも15世紀、いやそれよりも遙かに遠い初期フランスの時代から16世紀前半に流行ったトロイア亡命貴族の末裔という観点は棄てられて、それどころか「高度なケルト文明」と名付けられる、ガリアの建国神話に準えうる民族文化の称揚といった観点すらも棄却される。チュルケにとって古代スペインに棲息していた民族は、あらゆる最良目を許さない、蛮族であったのだ。この「霧の彼方」と歴史の対象の峻別は疎かにさるべきではない。わたしたちはこののちに歴史記述の対象となり得る「文明化された民族」の、スペイン王国に統合される

以前のさまざまな種族の営為を見ることになるであろう。だがここではチュルケが歴史の発端に「文明」を捜すというイデオロギーにとらわれていなかったということ、それを確認しておけば十分である。

「文明」はともあれ、放浪民族は文化の概念とそぐわない。「文化」とは「定着」だからである（cultureの語源が「耕すこと」にあるのはいうを俟つまい）。チュルケは最初の一巻のうち、無視すべからざるページを割いて、スペイン各地を放浪し、そのアイデンティティを守ろうとしていた部族を活写する。しかしスペインはいつまでも「霧に彼方」にとどまっていたわけではなかった。チュルケによれば、エジプトのオシリスがスペインを放浪する蛮族の非文化化状態に同情して、エジプト人の大軍を派遣し、文明の何たるかを教えようとしたという。チュルケはオシリス神話を歴史の発端に据えて、オシリス歿後、その子供たちが覇権争いに走る様子を描いている。そしてその子供たちがスペインを分割統治すべく、居城を構えた地域にどのような歴史が流れてゆくかが、この巻につづく第2巻以降の記述の基本的な筋立てとなっていく。これがマリアナの『フランス通史』とチュルケの『フランス総史』の歴史記述構成における根本的な相違を形成することになるわけだが、それについては後述する「総史の構成」の章にゆずるとして、ここでは先を急ぐまい。スペインが分割されて古代諸王の乱立時代を走り書きしたあと（資料が乏しい古代社会を世界ではじめて描くのに、「走り書き」以外のどのような方法があったのだろう）、チュルケは次のような一節を挿んで、古代スペインの地理に多くのページを割くようになる。

（引用－2）〔I.16〕

さてわたしたちはこれから先、論ずべきことがらにおいて、いっそう洗練され、いっそうひとびとや都市や要塞があまた見られ、いっそう明確な境界により判別制限され、何かしらこれまでわたしたちに姿

を見せなかったような、いっそう優れた政体や統治形態を有するスペインを見出すことになろうから、読者の助けになるよう、詳細に分け入るまえに、スペインの特徴的な描写をしておいた方が有益であると考えて。特徴的と言っても、普通のひとびとに慣れたやり方であって、同じような方法をつうじて土地の肥沃さ、大気の美点、スペイン人たる者の昔ながらの、そして今様の風習と性格のなにごとかについて触れたいと思う。

上記（引用－2）の一段とそれに直属する「スペインの描写」の章は「霧の彼方」もしくは「殆ど霧の彼方」のスペインと「検証可能な歴史」的スペインを分けるのに重要な役割を果たしていると思う。「スペインの描写」の段落から地中海に面した島嶼の描写を拾ってみる。

（引用－3）〔I.18〕・〔I.22〕

（A）スペインの西方海岸地方は昼夜平分線においてまっすぐであり、神聖岬、もしくは聖ビンセント岬から古代人がネリウムと呼び、わたしたちが地ノ果テ岬と呼んでいる岬まで、大海に沿っておよそ126里を有している。この距離の詳細は以下のごとくである。

聖ビンセント岬からタグス河口、もしくはこの河が当時名づけられていたようなタホ河口まで	25里
そこからムンダ川まで	25里
そこから大河であり、海に注いでいるドウエロ河まで	25里
そこからポンテバダまで	19里
ポンテバダから地ノ果テ岬まで	28里

計125里〔ママ〕であり、そのうちおよそ百里がポルトガルの管轄となる。

(B) これらの民族のあとに続いて、イベリア海もしくは地中海の海辺に沿って、ベステタン族と、コンテスタン族がいて、わたしたちの時代でいうと、オロスベダ山が隔てているムルシアとバレンシアがそれにあたる。バシヤの都市は、昔はベステタン族、もしくはベステタン族あるいはバシタン族の都市であって、この民族は同じくアッキ、すなわち現在のカデイスと称する都市を有しており、かつてはビヘラとオレセリスと呼ばれているベハールとオンゲラまで伸びていた。しかし当時メンラリウスと称していたムルシア、現在のセンチバであるセタビス、そして海に突き出している、いまではパロスとなっているソンプラリア岬、新しきカルタゴ、今日の<sup>こんにち</sup>のアリカントが相当するアロネ、おそらくいまのエルヘスがそうであろうイリシがあった。アリカントそれ自体、およびバレンシアの都市にはコンテスタン族がおり、彼らのあいだに混じって、イリトゥルヘが陸地を背後にし、海辺に沿って、あるいは上述のベステタン族のあいだに棲息していた。

地名や民族の同定が出来ないのでなんとももどかしいが、それはどうやらチュルケの方でも同様だったようで、異綴や「おそらく」といった補語がそれを示している。ただチュルケの「スペインの描写」に特徴的なのは、あくまでも空間的・地理的な描写に終始し、そこに逸話、挿話のたぐいがふくまれていないことだ。フォリオ版10余ページに及ぶ描写は「描写」に徹底し、各民族、各地方を尋ねれば必ずや存したであろう民族固有の、もしくは民族間の勲しや奇蹟譚、あるいは葛藤や戦闘が触れられることは、まず存在しないといってよい（これについては後述の予定）。そうした時間的・歴史的な営為は「スペインの描写」にさかのぼる「霧の彼方」で報告されるか、「描写」の節のあと延々と何10巻となく続く、それこそ「スベ

イン総史」で知らされるか、なのだ。これはあとで述べる『スペイン総史』の歴史叙述の方法にも関連してくるはずだが、空間や地理はチュルケの大部の歴史書のなかで大きな意味を託されている。ただ先走っていえば、歴史書のなかの空間や地理はその場その場のものであって、「スペインの描写」におけるような総合的・俯瞰的な視座から描かれるものではない。チュルケなりの、異国人による異国人のためのスペイン通史を提供するためには、歴史のためでもなく、民俗誌のためでもない、ただ空間的・地理的情報だけを、そのみを与える場が必要であった。そしてその場は「霧の彼方」の向こう側ではなく、実際にひとびとが干戈を交え始めるこちら側の前に置く必要があったのだ。

## 2-2. 本来の「スペイン史」以前

「スペインの描写」にすぐと続けてチュルケはこう語る。

（引用-4）〔I.29〕

ところでわたしたちが個別的な地方と民族ごとに描写してきたようなスペインは3つの主要な地域、もしくは3つの大きな地帯に分割された。すなわちベティカ地域、ルシタニア地域、タラコネシア地域である。ベティカ地域はスペインの中央を通るベティス河に由来してそのように名づけられた。これがガダルキビルである。この地域は一方ではアナス、もしくはガディアナと呼ばれる河によって取り囲まれ、他方では大西洋によって取り囲まれているが、その境界は海峡のところで曲がり、そこから地中海に沿って、カルタヘナの傍ら、もしくはカリデムム岬、もしくはガテス岬の傍らまで進んでいる。ガテス岬から陸路でカストゥロ、もしくは古カスロナまで進むと、今日ではアルカラのシエナ山と呼ばれているイドゥバダ山の山腹と、他方ではガテ

ス岬の傍らにあるムハクレからアルマグラまで線が引かれているかのように区切られている。この地域はもっとも素晴らしく、スペインの中でもっとも肥沃であるので、ポエニキア人やアフリカ人、その他の異国人からまず最初に羨望され、篡奪されてきた。

このような具合に、古代スペインがさまざまな民族から狙われ、絶え間ない謀略や戦闘に恰好な場を提供してきたこと、そして「個別的な地方」がやがて自主的に、もしくは狙われることによって、大きな地域に変貌することが予見されている。

古代スペインはローマ民族の属州となり、そのために陸上でも、スペインの海域でも、カルタゴとローマ、スペイン豪族とローマ遠征軍、ゴート族の侵略などの、あまたの敵対する対ローマ戦争、「蛮族」の侵略戦争において、覇権争いの戦場となってきた。チュルケは主としてスペインが戦場になったそうした戦争、戦闘の模様をこと細かに記述する。そして彼の筆は明らかにローマよりである。たとえば所謂ハンニバル戦争にあって語られるのは、有名なアルプス越えではなく、スキピオの軍略であり、しかもスペインの豪族とのあいだに交わされた戦闘、鎮圧、懐柔、和平である。

(引用－５)〔L68〕

彼〔スキピオ〕は新カルタゴで発見されたスペインの民衆や豪族の人質たちをみな自分のまえに連れて来させ、彼らにしみじみと話しかけ、期待を持たせて、彼らが、恐怖や暴力によって拘束するよりもひとびとの心を獲得し、正しい扱いによって彼らを導くようにさせる民族の掌中におちたのであり、その民族は忌まわしい隷属状態によってほかの民族を飼いならすよりも、彼らを忠実な仲間として受け入れる



ことを好んでいるのである、と宣告した。スキピオはスペインの都市と村落の数々の名前を巻物にして差し出させ、それらの都市や村落の各々にいる数多い捕虜について尋問し、使者を急行させ、彼らに警告して、その各人が自分の配下を受け取りに行くようにさせた。もし自分の陣地にそうした都市や村落の何らかの使節がいた場合には、即座に、彼らの配下であるひとびとを解放させた。

上記（引用－5）の前半は、もし間接話法でなければ、本稿の「歴史記述の構成要素」で扱う「演説」の項で取り上げてもよいほどのものだが、ここでは触れないでおこう。このようなスペインを舞台にとった戦闘や戦争処理の文章に捧げられたページ数は、おそらく圧倒的な史料の増加に原因して、「霧の彼方」や「スペインの描写」を描いた「第1巻」の比ではない。しかし筆者の見るところではそうした古代の合戦は『スペイン総史』の本領ではなく、「霧の彼方」のこちら側、すなわち「歴史」上の総史であることを表明するための枕に過ぎない。「第2巻」以降しばらくは、こうした武勲や敗退の記述が続くことになるだろう。引用に価する文章、策略、名場面は星の数ほどあるのだが、その間に挿まれたスペイン人の民族としての個性を表明する1段落を見ておきたい。これも「歴史記述の構成要素」で扱う「語り手〔チュルケ〕の私見」に入れられるべきもので、先走った引用になるが、「歴史の流れ」を澁ませる例として受け取っていただきたい。「第3巻」の冒頭の文章である。

（引用－6）〔L97〕

第2次ポエニ戦争の14年目、正確に言えばローマ建国紀元548年、P.コルネリウス・スキピオが執政官となり、副官としてP.リキニウス・クラッススがあてられた。彼らの統治のあいだ、スペインに一大

戦争が煽動された。その後、スペインにおいてローマ人の事情はカルタゴ人をその地から追放してしまうまで、なにごとよりも以上に安らぎがあることはなかった。それというのもスペイン人は生まれながらに休息の敵であり、自由を欲し、にもかかわらず、調和と有効な理解という、自由な状態にとどまるゆいいつの手段を軽蔑し、あらゆる機会をとらえて反乱を起こしていたのだった。もし彼らが、自ら十二分に備えているような。戦闘における勇猛さと勇敢さと同じくらいの慎重さをもちあわせていたのだったら、ローマ人がこの地方を占領下におこうとしても無駄だったろう。ローマ人はこの地でもっとも立派なひとびとの血と、かくも多くの時間と意義を費やしてしまったのだ。スキピオの出発にいたるまで、そしてその後まもなく、ローマ人たちは、スペインをほとんど中央で分割し、そのうえそのかなたで北方に向かっている山岳に住む民族を挑発したのち、自分たちの数々の征服はまずもって地中海からさほど遠く離れておらず、ベリス河から大して超えていないのであった。しかしそののち彼らは同じスペイン人でも、傭兵であり、他人の争いのために武器をとる者と、自分たち自身の自由と、自分たちの家や家族のために武器をとる者とのあいだにはどれほど大きな違いがあるのかを知ったのだった。

(以下次号)